

発 明 文 化 論

〈第 76 回〉

丸山 亮

ラオス流の行き方

ラオスを旅してきた。首都のビエンチャンから古都のルアンパバーンに飛ぶ機中より下を見おろすと、緑に覆われた低い山巒のところどころで噴煙が上がっている。あれ、こんなところに火山があったのかと思ったが、それにしても数は多い。人が何かを燃やしているのか。炭焼か、焼畑か。どっちだったのだろう。今回の旅は、さらにメコン川をボートで上流に向かってタイとの国境に近い県都ファイサーイに至る1週間。短い旅ながら、あまり知られていないこの国の様々な顔に接することができた。

ルアンパバーンの朝6時、外はまだ暗い。街角に立っていると、濃い黄色の衣を着た少年僧が列を作って托鉢に回るのに出会う。家の前の道端に、婦人が何人も座っている。僧たちがその前を通るとき、待っていた婦人たちは鉢の中へ食べ物などを入れ、僧の行列はあっという間に去っていく。この少年僧たちは大きな寺院の寄宿舎に普段は寝起きして、共同生活を営んでいる。寺の脇にある鐘楼に太鼓が吊るしてあり、その鳴らす音が生活のリズムになっているようだ。こうした寺はラオスの各地にあり、出家した少年の男子は一定期間、修行の生活を送る。仏教徒が多くを占めるこの国の風景は、隣国のタイなどとも似ている。寺院には熱心な信者が訪れて祈りを捧げ、僧を前に座して対話する場面もときどき見かけた。仏教は、いまだにこの国の精神生活の大きな部分を占めている。

メコン川は中国、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを潤し、南シナ海に至る、物流の動脈のようなものだろう。スローボートと呼ばれる船でまる2日間、川をさかのぼった。ところどころ中洲や大きな岩があり、操船は難しそうだが、船乗りはケータイで連絡しながら舵を取ったりしている。乗客には土地の人たちよりも、観光客の方が多い。ヨーロッパやオーストラリア、中国、韓国からが目立ち、日本人は少ない。緑の濃い沿岸には炭を焼いているところがあったり、列を組んだ象が荷を運んでいたり、たっぷり旅情が楽しめる。炭は炊事によく使われるようだ。

ファイサーイで夕食に入った食堂。フナに似た白身の魚に香草を詰め、塩焼きにした一品がうまい。料理とラオスのビールに満足して、支払いを現地通貨のキープで払おうとすると、違う、パーツだという。ここはメコン川岸の船着き場を中心に発展した町で、すぐ目の前の対岸はタイだ。人や物の行き来は両岸で盛んだから、ラオスよりもタイの通貨が普通に通用する。それにしても不思議な感覚にとらわれた。主権国家でありながら、外貨の方が好んで使われている。

ラオスの人口の多くを占めるラーオ族は、全体の半分ほどで、そのほかには50近くの少数民族が分割している。ラオス語が公用語とされるものの、この民族の多様性が、一元的な教育を阻んでいる面もあるらしい。初等教育の就学率は9割を越え、決して低くないが、ラオス語で行われるため、母語がちがう少数民族の子供は苦勞するようだ。

ラオスはベトナム戦争時、北ベトナムから南ベトナムに向かう軍事物資の輸送路、ホーチミンルートとなった。アメリカはこのルートを断つための爆撃などを行ったが、世界の目がラオスに注がれることはなかった。ラオスとベトナムは、軍事協定で結ばれているほか、経済協力も密接だ。

ラオスという国は、強固なアイデンティティーを求めるのではなく、周辺国と融和しながら、わが道を行くといった趣がある。人種や言語なども相互に浸透して入り組んでいるので、純粋にラオス的なものを求めることに意味はないのであろう。仏教的な寛容の精神もそれを助けていると思われる。

世界の紛争地域であるアフリカや中近東に、こうした共存共栄の知恵は生まれえないものだろうか。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)